



春のお彼岸(七日〜十三日) 彼岸・日願・悲願

お彼岸の中日は、太陽が真東から上り、真西に沈む日です。ちょうど昼と夜の長さが同じになります。このことから仏教の説く中道の教えにかなうとされてきたのです。中道の教えとは、何事にもかたよらない心の持ち方、生き方のことだと思えます。「彼岸」という言葉は、「日願」に通ずるという説があります。昔は、地方によつては彼岸の期間中に「日の伴」「日迎え」「日送り」の行事が残っていたと言います。この期間中、村人は、朝は東のお宮やお寺に参り、昼は南のお宮やお寺に参り、夕には西のお宮やお寺に参つたといっています。まさに、太陽、すなわち日に願をこめていたのです。「日天願」「日の願」という言葉も残っていたといえます。この素朴な太陽崇拜が仏

寺 101
清 12663
宝小 58-1

住所 東京都あきる野市小川一〇一
電話 〇四二五―五八―二六六三
FAX 〇四二五―五八―二六九三
住職 石井 前瑞
寺務所 所長 伊藤 勝之

教の先祖供養と結びつき彼岸となったというわけです。現在でも彼岸習俗のひとつとして「天道念仏」(太陽を拝む)は行われています。実際、お彼岸の行事がひろまつたのは「観無量寿経」に説かれている「日想観」がもとになったものです。阿弥陀如来の仏国土は西方浄土です。太陽が沈む西方に極楽があると信じて、日本人は極楽浄土を祈つてきたのです。また、「悲願」という言葉を「広辞苑」で調べてみました。そこには「仏・菩薩がその大慈心から発する誓願。阿弥陀如来の四十八願、薬師如来の十二願などの類」とあります。一般には、「せひとも

任意寄付
見成 による、鐘
成元 楼に下写真
の切妻屋根
の鐘楼を檢
討中です。

今回は仏教ゆかりの食物の九回目として、日本人の民族的飲料「せん茶」について紹介致します。お茶を日本に伝えたのは臨済宗の開祖栄西禅師です。そのお茶も、今や日本人にはなくてはならない飲料となつていきます。とくに形式を重んじる茶道と違い、せん茶は、茶葉に熱湯を注ぐだけという自由なところが大変良い。せん茶を庶民にひろめたのは売茶翁、すなわち万福寺の僧元昭です。売茶翁は花見や紅葉など京都各地に出かけ、客にせんで歩いた。売茶活動の結果、元禄のころには、せん茶は町民の間にも広まり、やがて家庭茶として定着するようになった。以来、食事にせん茶つきものになった。コーヒー党もいるが、その普及度は、せん茶と比較すべきもない。「日常茶飯事」という言葉が示すように日本人に不可欠な飲料です。今回は「昆布」について紹介致します。



達成しようとする願い」などとして使われていますが、悲願という言葉も本来仏教用語なのです。悲願とは願をたてること、慈悲の心を持つということ。願をたてることを發願といいますが、今の人は「願をたてる」とはあまり言いません。仏教には、「四弘誓願」(四誓、総願偈)という教えがあります。宗派によつて多少語句が違いますが、日蓮宗では法事等の読経の最後に唱えます。一、衆生無辺誓願度、二、煩惱無数誓願断、三、法門無尽誓願知、四、仏道無上誓願成、ですが、その意味は、一、はすべての人を救つて悟りに導くという誓い、二、は迷いはつきませんが、それを断つという誓い、三、は数かぎりない仏の教えのすべてを、一つひとつ学ぶという誓い、四、は仏のみはこの上なく深いものです。体得するという誓い。この四つの誓いこそ、「彼岸の心」です。私達も彼岸を機に、一つでも悲願をたて、より意義のあるお彼岸にしたいものです。お彼岸には搭婆をあげお参り致します。

任意の御寄付も多数の方々のご協力を戴き、皆様方のご厚志に対し深く感謝致します。造成工事・客殿完成後、集まつた浄財は総代会で鐘楼建設及び参道の整備に充てる事になりました。この度の事業を一人でも多くの皆様のお力をお借り完成させたいと考えています。平成九年三月末日に一旦まとめたかと考えています。鐘楼及び参道の建設及び工事の見積額には達していません。不景気な社会情勢から心苦しいのですが、再度一人でも多くの方々のご協力をお願い致します。

管理料の期間はその年の四月〜翌年の三月です。平成8年度までの管理料を未納の方は春彼岸までに納入されるようお願い申し上げます。管理料を振り込まれる場合は、後記の管理料専用口座にお振込下さいませ。多摩中央信用金庫 秋川支店 普通預金口座番号 17-1516219 (多摩信からの振込はネット入金と申し出れば手数料は無料ですので、ご利用下さい。)

休憩所及 造成工事 休憩所の上棟式も二月二十七日に終わる本格的に工事が始まりました。また、客殿建設の前の造成工事も開始致しました。造成工事の完成予定は今年の七月頃客殿の落成は平成十年三月頃に成りそうです。